A-7

2012 年度「英語 IIIA・B」（集中授業）：第 1 回学科選抜チャレンジクラスの結果

The 2012 English IIIA/B Intensive Course: Results of the First Challenge Class

○ヴァンバーレン・ルート[1]，谷岡朗[1]，　鈴木孝[1]，　ファラウト・ジョセフ[1]，
中村文紀[1]，ハリソン・ジョナサン[1]，乙黒麻記子[1]，内堀奈保子[1]
* Ruth Vanbaelen[1], Akira Tanioka[1], Takashi Suzuki[1], Joseph Falout[1],
Fuminori Nakamura[1], Jonathan Harrison[1], Makiko Otoguro[1], Naoko Uchibori[1]

Abstract: In 2012, the English IIIA/B Challenge Class (Intensive Course) was held for the first time. Nine supporting departments recommended students with top-ranking English grades who can be expected to use English skills in their further careers. This new course was taught as an intensive course both in summer and spring with as ultimate goal improving students' TOEIC scores. This report provides a summary of the course, analyzes the participants' scores and states concerns to be addressed in the future.

１．はじめに

本稿では, 2012 年度に初めて実施された集中講義「英語 IIIA・B チャレンジクラス」について, その成果報告と検証を行う．英語 IIIA（前期）における受講者の目標設定とその結果については Harrison 他［1］がすでに検討したが, ここでは一年間を振り返り英語 IIIB（後期）の結果をふまえながら, 今後の課題を明らかにしたい.

２．方法

前期･後期のチャレンジクラスを受講し, 各学期終了時に TOEIC IP を受験した学生は 8 名で, 1 年次に実施した TOEIC Bridge の成績上位者で学科から推奨された者である．担当教員は 6 名（前期 5 名，後期 4 名）であった．授業は各学期とも前半が 3 日間，後半が 2 日間で，間にほぼ 1 か月の自主学習期間が設定されている．授業日は必ずリスニング項目とリーディング項目の授業があり，受講者が十分に 1 つの項目に集中できるように，各項目を連続して 2 コマ行うことを原則とした．スケジュールのサンプル，担当教員や教材の詳細については Harrison 他［1］を参照されたい.

自主学習期間は，受講者が自主的に目的に取り組む学習姿勢の重視と，スコアアップに必要な学習時間の確保の目的で設定された．受講者は授業開始までに取得した TOEIC スコアなどに基づき，目標のスコアを各自が設定し，自主学習期間の週毎の学習計画を立ててスコアアップを目指した．自主学習期間終了後には結果報告が義務づけられており，成績評価の材料となる.

３．結果と考察

通年のデータ（紙幅の都合で，発表時に提示）から，前期開始時より後期終了時に TOEIC スコアが上がった受講者 5 名，同じスコアが 1 名で，下がった受講者は 2 名であった．また，後期終了時に目標のスコアを達成できた受講者は 3 名で，前期終了時よりスコアを上げることができた受講者は 2 名であった．受講者が 8 名という少数であったことから直ちに結論を出すことは難しいが，「目標設定」（Harrison 他［2］を参照）「モチベーション維持」「担当教員数」「授業形態」などが検討課題にあげられる．詳しくは発表時に譲ることとし，ここでは以下で英語 IIIB（後期）のデータを具体的に分析したい.

Table 1 は，前･後期終了時に実施された TOEIC の TOTAL スコアおよび ETS が定めた各項目の得点率について，その伸びを示したものである. TOTAL スコアを見る限りでは，大半の学生が点数を下げている．受講者にとっては, TOTAL スコアの上昇が最大の目的であり，学習のモチベーションとなることを考えると, 集中授業の組み立て方やその教授法に検討すべき点や改善すべき点が含まれている．しかしながら, 各項目のスコアの増減を見ると，一つの傾向があることがわかる，　即ち, 授業内で重点的に取り上げた項目については学生が伸びを示しているのである.

リスニングの授業においては，ネイティヴ・スピーカーの教員が，学生との対話を中心に据えながら, TOEIC 形式の演習・解説にあたった．その結果，容易な短い英文(L1)については対応する力が比較的向上している．しかし，難易度は変わらないが長い英文(L2)や，短文であっても内容が難しい英文(L3)には，対応できなくなる傾向がみられる.

１：日大理工・教員・一般

リーディングに目を向けると，特にR2およびR5で正の値を示している学生が大半を占めている．紙幅の関係で詳細は割愛するが，リーディングスコアそのものも明らかな上昇を示している．後期の担当教員は，前期のデータから学生の弱点を検証し，文法問題(R5)を「勘」ではなく「論理的に導く」訓練を徹底的に行った．また，多くの受験者が解答を最後まで終えることのできないPART 7 (R1～R3)に時間を割くことができるよう，精確さを維持しながら1問あたりにかける時間の短縮を目指した．PART 7は，難易度の高い問題も多く見られるが，授業を通して基礎的な解法を習得できたことで，R1やR2といった文章からの情報を読み取る基礎的な力をみる項目で伸びがみられたといえよう．その一方で，PART 7でも複雑な問題に対応するR3，さらには語彙力に相当するR5においては負の値が多くみられる．R3については，PART 7の問題演習が不足していたことや時間配分のミスなどに起因すると推察される．語彙については，その強化がリーディングのみならずリスニングにおいてもスコアアップの大きな要素となるため，授業内でも取り組む必要がある．

Table 1: TOTAL スコアおよび項目別スコアの伸び

学生	TOTAL スコアの増減	L1	L2	L3	L4	R1	R2	R3	R4	R5
A	−15	3	−11	−4	−19	−10	11	−5	20	14
B	5	9	−31	−9	−14	3	−16	−4	14	2
C	−80	4	8	−4	9	−16	23	−28	−21	18
D	−10	−22	−22	−14	1	1	10	−21	14	−17
E	−45	−2	−22	−24	−3	7	16	−7	−4	18
F	−35	−11	46	−9	29	−7	4	31	−2	7
G	135	0	−10	−10	−4	−5	−20	−2	−3	−4
H	−65	14	−12	−9	−4	33	4	−37	−16	11

４．結論と今後の課題

2012年度に初めて「英語IIIA・B学科選別チャレンジクラス」が集中講義の形で行われた．年間を通してみると，8名の受講者のうち5名がTOEICスコアを上昇させている反面，下げてしまった者も2名あった．また，前期終了時に比して後期終了時にスコアが伸びなやんでいることがわかった．それに対処するには，学生側にはTOEICスコアの目標設定をいかに適切に行うか，また，自主学習期間のモチベーション維持をどのように行うかという課題があり，教員側には複数の担当教員で集中授業という形態を十全に活用できたのかという課題があると思われる．英語 IIIB（後期）の TOEIC スコアのリーディングとリスニングの項目別達成増減の分析から，網羅的な授業内容とするのではなく，テーマを絞った授業とすることにより スコアアップに繋がる可能性があることがわかった．

初めての試みであり受講者も8名であることから，今回のデータだけでチャレンジクラスの意義を結論付けることはできないが，今年度も継続して実施している同クラスの結果と併せて，今年度から始まった英語III全受講者TOEIC IP受験の結果も比較検討することにより，より有効な教授法や授業形態を模索していきたい．

５．参考文献

[1] Jonathan Harrison, Akira Tanioka, Takashi Suzuki, Joseph Falout, Ruth Vanbaelen, Fuminori Nakamura, Makiko Otoguro: “English IIIA Challenge Course: Students’ TOEIC Goals and Actual Outcomes”，第 56 回日本大学理工学部学術講演会（CD-ROM），日本大工理工学部，2012 年.

[2] Jonathan Harrison, Akira Tanioka, Takashi Suzuki, Joseph Falout, Ruth Vanbaelen, Fuminori Nakamura, Makiko Otoguro “Blended Learning in a Summer TOEIC Course”，Moodle Moot 2013，口頭発表，2013 年 3 月 3 日.

６．謝辞

学生を推奨して，TOEIC IP の受験料を負担してくださった学科と英語に熱心な受講者にここに感謝の意を表します．